

砂漠のトラックロード

マナボン (田口学)

砂漠に車が走る。
あとには無機質な轍。

考えてみたら、別に变じゃないのかも知れない。世界最大の砂漠、サハラでさえパリ・ダカールラリーをやっているじゃないか。RV車のCMでは深い砂漠を軽々と走って見せるじゃないか。特異な能力を有する訳じゃない俺たちでも歩ける砂漠で、現在の技術力を持ってして砂漠に車が走れないなんて思うほうが、馬鹿なんじゃないか。

と、開き直って考えないと切ない気がしてしまう。タクラマカンに轍の跡がくっきり。土足で俺の部屋に上がり込んできて、踏み散らかされたようだ。あの轍を見たおかげで、日本の都会の雑踏と同じく俺たちは、車に轢かれよう注意して歩かないといけなくなった。

「ラクダ君たち、君たちはどう思うの?」と聞いてみた。「いやー、昔みたいに死にもの狂いで仕事せんでよくなって、助かるよ」と最長老ラクダ・ドゥンルカは言う。「そうやな、わざわざ昔の手段使って砂漠を歩くことないよな。トラックが走れるんやったら、トラックで横断すればいいよな」。「お前らが言うな!」。ちゃんちゃん。

「タクラマカンはそこの砂漠とは違うねん。シルクロードはわざわざあの砂漠を避けて迂回したんやぞ。砂漠に迷い込んだ人は、例え偉いお坊さんでも気がおかしくなるくらい恐ろしいところや言うて2度と近寄らんや。それだけに、砂上の黄金伝説なんかは豊富やったらしい。もしかしたら、今度歩いてる時に謎の楼閣でもみつけてまうんとちゃうやろか。もしそうになったら、誰にも教えずにそっとしとくのもええと思わんけ。世界中で誰も知らん砂漠の神秘や。手を付けずにそのままおいとこ。でも、写真一枚だけ撮っとこ。田口家の家宝や。楽しみやわー、早く行きたいわー」。一体、こんなロマンを抱かせるところが世界中にどれだけ残っているんだろうか。タクラマカンは未だ知り得ない神秘の夢を見ても良いところだと信じていた。



「げっ!!。なんやねん、これは」動揺する隊員の顔。「嫌じゃ。こんなとこ、歩きたないわい」「じゃー走る?」「おっ、そええ方法や。・・・い、いや違うやろ。そういう意味やないわ」などとやり取りせずにはいられない心境にいた。一晩寝てみないと気持ちに整理が付かない。

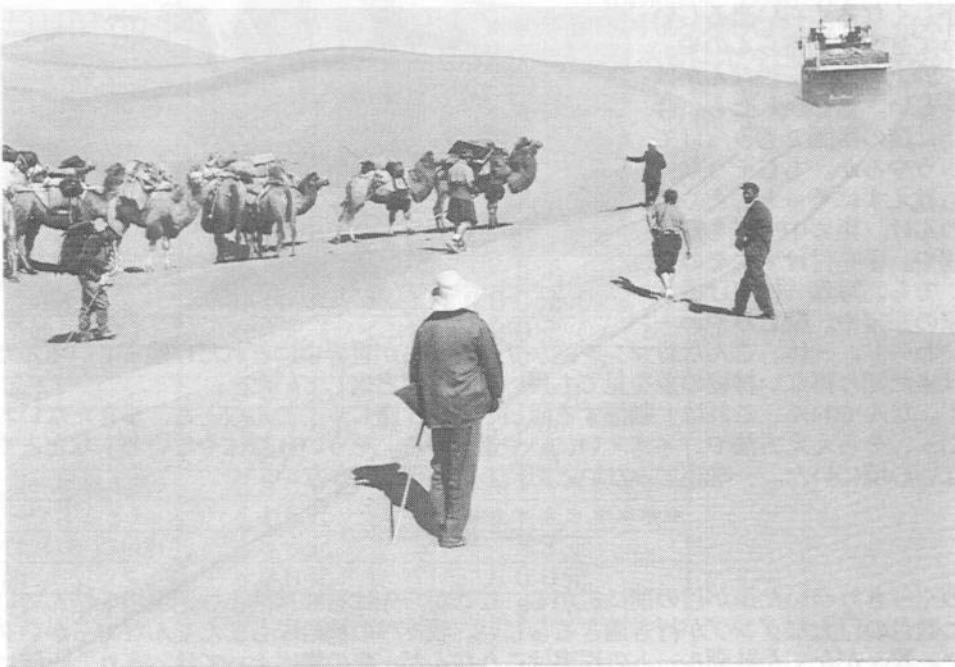
~~~~~一晩~~~~~

「車の轍のくっきりついた道が目の前に広がる。ここから先は石油基地と採掘現場を結んでいるとかでるとかで一日に数台の巨大なダンプが行き過ぎるらしい。我々への補給隊もまたそんなでっかいダンプののってやって来た。我々がたてた計画ルートの実現はこうなんだ。車の轍によってはっきり、正確についたルート。俺の尻の青いロマンとは関係なく時代は進み、流れ、そして、そこに生活がある。あんなでっかいダンプが通り過ぎ、砂漠のど真ん中に速度標識が立っている。それらは必要とされているもの。人間が文化を持ち、生活を続ける、その中からタクラマカンの石油が必要になり、この轍が作られた。そして、俺たちは行きたいから、歩きたいからここにやってきた。隠された形だけの未知のルートより、現実に生きたタクラマカンルートを行こう。異国の、異文化の人々と共に、この道をゆけ。この道をのんびりとゆっくりと、仲間と共にゆけ。」と10月2日の日記の文字は震えながら記されている。なつかしいな。夜になったら、物音ひとつしない砂漠にぼつんとたっているテントの中で、ヘッドランプをつけて日記を書いたな。この時のこともなんとなく覚えている。結構、力んでいますね。

誤解があってはいけないので、少し解説を。タクラマカン砂漠は東西2000km、南北400km。その中に、最近砂漠縦断道路ができた(これは我々の見た道ではない)。中国の砂漠開発能力は結構高く、こんなところに舗装道路をつくってしまった。しかし、砂漠内どこでもトラックが行き来できるかと言えば、全くそんなことはない。日本に居ては及びもつかない高い高い砂丘がどこまでもどこまでも続く。それは鳥

取砂丘などを引き合いに出して考えてはいけない。あたかも、高槻のポンポン山とエベレストほどに違うものである。トラックロードとかくっきりした轍など書いてきたために、決して嘘ではないにしても、実際にそれを見た我々以外の方々の頭の中には正しくイメージされていない砂漠観を抱いておられることかと察する。確かに、日に数台のトラックはハイパワーを全開にしてやって来る。が、それは1台ずつでは事故をした時に助けを求められないから、複数台でやって来る。また、砂漠に轍がくっきり残るのは同じ轍の上を全部のトラックが踏んで行かないと砂と風の作用で轍が無くなりルートを見失い危険だからである。そのため、中国が総力を挙げた前記の砂漠縦断道路以外に舗装され決められた道などないのに、西に行くトラックも東に行くトラックも同じ一本の轍の上を行くしか方法がないのである。つまり、広大に、視界の及ぶ限界の更にずっとずっと遠くまで開けている砂漠に一本だけトラックの歩みがあるのです。その気になれば、トラックを見ずに歩くことなんてたやすかった。2、3 km脇にそれたらそれでもう非現実の世界だ、例外だ、と言って無視して取り上げなくてもいいと言えないこともないな。

朝日新聞のトップに大きくこの記事が載りましたね。あれは快挙だと思います。大学探検隊が天下の朝日のトップを飾るなんて。「あの写真はオレが撮ったんだよ。エヘ」などと喜んでもるのも、すこぶるよろしいが、一体あの記事が多くの皆さんにどんな風に届いたのか、興味があります。僕たちと同じ様に現実を目の前に突きつけられて、ロマンの余地を奪われ、慌てたかもしれません。でも、見ないよりは見たほうが良かった、と僕自身については考えている。僕の好きな言葉に「旅の原点は、その土地の現実を受け止め、それを肯定し、理解し、自分の人生に生かしていくこと」というのがある。上手く伝えられないけど、あの道を歩いたことは素晴らしいことだったんじゃないか。



朝日新聞に掲載された写真